

スポーツ活動中に生じた急性広背筋損傷の2例

○合六 孝広¹⁾, 米田 稔¹⁾, 山田 真一²⁾, 正富 隆³⁾

¹⁾ 大阪厚生年金病院 スポーツ医学科

²⁾ 大阪厚生年金病院 整形外科

³⁾ 行岡病院 整形外科

【はじめに】

スポーツ障害の一つに稀ではあるが、急性広背筋損傷がある。今回我々は保存治療で良好な成績が得られた2例を経験したので、若干の考察を加えて報告する。

【症例1】

15歳、男性、右利き、アメリカンフットボール選手。

主 訴：左肩後方の痛み

既往 歴：特記すべきことなし

現 病 歴：2006年8月6日アメリカンフットボールの練習中、肩を進展した状態で後方に転倒した。肩後方の断裂感とともに痛みが出現した。痛み続いたため2006年10月25日当科を受診した。

初診時所見：広背筋、大円筋付着部付近に圧痛を認めた。挙上は90度であった。90度外転位内旋と伸展の筋力が低下していた。

MRI 所見：T2強調画像の冠状断像と横断像で広背筋付着部付近の一部に high intensity の病変を認めた。

経 過：広背筋部分断裂の診断でストレッチを開始した。受傷後3ヶ月でほぼ痛み消失し、挙上も180度となった。現在も痛みなく、アメリカンフットボールに完全復帰している。

【症例2】

28歳、男性、左利き、プロ野球投手。

主 訴：左肩後方の痛み

既往 歴：20歳のとき、左肩腱板不全断裂に対して鏡視下腱板デブリードメンと左肘変形性関節症に対して鏡視下関節形成術。

現 病 歴：2007年2月19日座位で腕を強く振る投球練習をして、左肩後方の痛みが出現した。痛みが続いたため2007年2月23日当科を受診した。

初診時所見：広背筋、大円筋付着部付近に圧痛を認めた。挙上は180度可能であった。90度外転位内旋の筋力低下を軽度認めた。

MRI 所見：症例1と同様の所見を認めた。

経 過：広背筋部分断裂の診断でストレッチを開始し、投球は禁止とした。受傷後1ヶ月で痛みは軽減し、徐々に投球を再開した。受傷後2ヶ月で投球時の痛みが消失した。現在も左肩後方の痛みなく、野球に復帰を果たしている。

【考 察】

広背筋損傷の多くはレントゲン上異常がない。そのため、MRIが必須である。他の筋損傷同様、T2強調画像において high intensity の病変を認めるとされている。本症例ではその範囲が狭く、部分断裂と思われた。部分断裂の場合は、他の筋損傷と同様保存治療で良好な成績が得られると思われる。